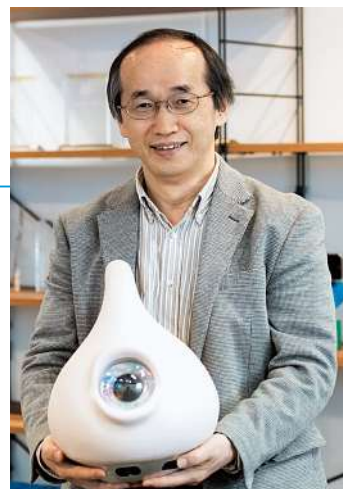


〈弱いロボット〉にみる 幸福感とテクノロジー

豊橋技術科学大学 情報・智能工学系教授

岡田美智男

おかだ みちお



手をつなぎながら、公園の中を一緒に散歩する。このぶらりとつないだ手の感覚は、とても心地いい。そしてなぜだかうれしくなるのだ。これはなぜなのかと思う。

もともと、いま手をつないでいるのは、彼女の手でも娘の手でもない。ようやく歩き始めた私の孫娘、玲ちゃんの小さな手なのだ。あまり頼りにならないけれど、少し委ねるようにしても面白い。私に半ば頼りながらも、しっかりと自分の意思で歩けるのがうれしいのだろう、子どもの表情もどこか晴れやかなのだ。

視覚障がい者のマラソンである「ブラインドマラソン」では、走者と伴走者との間をつなぐ「ひも」

がとても大切な役割を果たすのだという。相手を導こうと手をしっかり握ってあげれば、安全に走れるのかもしれない。ただ、そうした配慮は相手の主体性をも奪ってしまう。一方的に誘うのでも、誘われるのでもない、そんな「緩さ」も大切なのだろう。

私たちの日々の暮らしの中ではどうか。自動運転システムなども、そろそろ手が届きそうに思うけれど、どこまで委ねていいものか、少し気になる。便利、便利と言いつつも、システムの独りよがりな判断に振り回されては疲れてしまう。そして、どこかうれしくない。ただの「荷物」として扱われていたのでは、とても寂しいことだろう。

こうした背景もあって、筆者らの研究グループで

は、ちょっと頼りないような〈弱いロボット〉の研究を進めてきた。自らはゴミを拾えないものの、周りの子どもたちの手助けを上手に引き出しながら、結果としてゴミを拾い集めてしまう〈ゴミ箱ロボット〉、街角でモジモジしながらティッシュを配ろうとする〈アイ・ボーンズ〉、子どもたちに昔話を語り聞かせようとするも、時々大切な言葉をモノ忘れてしまう〈トーキング・ボーンズ〉などなど。いずれも、周りの人の手助けを上手に引き出しながら、なんとか目的を叶えようとするロボットたちである。

開発当初は、他者の手助けを上手に引き出しながら、ちゃっかり目的を叶えてしまうという、ロボット側の「社会的なスキル」に着目していた。しかし、子どもたちが遊んでいる広場に〈ゴミ箱ロボット〉を



〈ゴミ箱ロボット〉と子どもたち

運んでみると、子どもたちの意外な振る舞いや表情に目を奪われることに…。

「なんだ、コイツは！」と、その様子を遠くから眺める子どもや、近

づいてはロボットを揺らしてみよう子どもに交じって、遠くからゴミを集めるなど、小さな子の面倒をみるかのように世話を始める子ども、そして〈ゴミ箱ロボット〉の中に無造作にゴミが捨てられるのをかわいそうに思ってたか、勝手にゴミの分別を始める子どもも現れた。なぜだか、彼らはみな喜々としているのである。

自らの力ではゴミを拾えない、どこかヨタヨタして頼りない…。そんなロボットたちの「弱さ」や「不完全さ」は、むしろ子どもたちの優しさや「強み」、あるいは工夫を引き出している。加えて、子どもたちのウェルビーイング（＝自らの能力が十分に活かされ、生き生きとした幸せな状態）を生みだしているようなのである。

「もともとと利便性を追求しよう！」「ロボットなのだから、自らの手でゴミを拾い集めればいい。手もかからず、それはそれで便利ではないか」——こうした至れり尽くせりのサービスマンや、利便性・合理性一辺倒の価値観もそろそろ曲がり角にあるようだ。利便性を享受しつつも、お互いの主体性を奪わない程度の関わりをどう維持するか。その中で、私たちのウェルビーイングをどう生みだしていくのか。自動運転システムや最新の生成AI技術などの台頭にあわせて、改めて考え直してみたいテーマなのである。

時の調べ Essay

略歴
1960年福島県生まれ。1987年東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了。NIT基礎研究所、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）などを経て、2006年より現職。主な著書に『ロボット―共生に向けたインタラクション』（東京大学出版会、第31回大川出版賞）、『弱いロボット』の思考―わたし・身体・コミュニケーション』（講談社現代新書）、『弱いロボット』（医学書院）がある。